

911.3  
= /

門

門

一

夜

口

情



蕉門口授貞真之式 第一卷略

俳諧の道とて事

式曰俳諧は何の事とて事や答曰

俗談平話を正せんや

俳諧と事

俳諧の安き歌連歌の如き事とて心

向とのつた事とて事





蕉門一夜口授

言のそり絶

○ 蕉門の本意

○ 古池のおつ

○ 俳士乃 廢衣 賤

○ 片歌のあそび

○ 笥の風のかさ

○ 十部書のはし

古池や

蛙飛

こえ

のりや音

翁

深川庵中之蛙





○ 三竹葉の端

○ 香をまきとせむ年

○ 雑の糞日とよむ

○ 俳席の守

○ 子とぬ心得

終

空一社以多う新風一紙平や片

紫のせきとのやうなうら小圃一故を以

尋んとは誰は津くそ旅を録せし

立らちのふとまをそ十と坊はとと女

過し一くさる西一を望に思ふ女

けんこの目さの道すく古跡をさる

くはし見たりつる。是を云ふと

事しやうや水ハ止む國ハおつる



よわしきまゝ 芭蕉家の道に  
をよむまゝに 水と是をよむまゝ  
友の心をもて一屋を以てし 家も  
くもぬまの 跡もなき ぬたふ 御を乃  
前 花屋に 花の 心も 以てし 人此  
屋も 此 裏坐蒲の 飯の 飯屋 せら  
まゝ 今 其 備あつと せし せし せし  
家 居あつ 我心も 禅林 古 座乃

心地しそえし 亦 中を 歸す 此  
頃 此ら 乃 人々 家々 文書 せし  
心 せし 一 屋 此 一 座 一 せし

野 花 乃 人々 名 花 あり 見 けし  
今 風 流 人々 不 任 月 雪 の 心  
か 心 せし 中 復 せ 極 楽 橋 と せ  
以 心 せし 其 頃 乃 此 乃 亦 心 せし  
野 啼 野 原 あり 一 心 せし 心 せし







今日の子<sup>シ</sup>又<sup>ヲ</sup>面<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>と<sup>テ</sup>又<sup>モ</sup>と<sup>テ</sup>風遊<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>す<sup>ル</sup>也  
此<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>モ</sup>正<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>端<sup>カ</sup>端<sup>ニ</sup>坐<sup>ス</sup>  
坐<sup>シ</sup>受<sup>ク</sup>る<sup>事</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>ん<sup>ヤ</sup>

答曰<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>意<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>形<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>思<sup>フ</sup>  
無<sup>ク</sup>邪<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>教<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>一<sup>ニ</sup>言<sup>ヲ</sup>也<sup>ニ</sup>も<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>  
く<sup>レ</sup>と<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>レ</sup>中<sup>ヲ</sup>行<sup>ク</sup>ん<sup>バ</sup>得<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>  
得<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>ん<sup>バ</sup>其<sup>ノ</sup>放<sup>テ</sup>下<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>

問曰<sup>ク</sup>今<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>楚<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>と<sup>テ</sup>補<sup>テ</sup>る<sup>人</sup>今<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>風

悉<sup>ク</sup>か<sup>ル</sup>ん<sup>バ</sup>是<sup>レ</sup>皆<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>家<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>バ</sup>以<sup>テ</sup>す<sup>ル</sup>  
衆<sup>ノ</sup>白<sup>ク</sup>い<sup>ふ</sup>一<sup>ヲ</sup>附<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>バ</sup>其<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>  
端<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>

答曰<sup>ク</sup>世<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>行<sup>ハ</sup>く<sup>レ</sup>楚<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>分<sup>ク</sup>つ<sup>ル</sup>ハ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>  
其<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>も<sup>シ</sup>皆<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>正<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>只<sup>ク</sup>俗<sup>ノ</sup>理<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>非<sup>ズ</sup>  
理<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>差<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>端<sup>ニ</sup>的<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>バ</sup>以<sup>テ</sup>す<sup>ル</sup>  
乃<sup>チ</sup>詞<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>説<sup>ク</sup>く<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>二十五<sup>ノ</sup>ヶ<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>所<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>

破<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>何<sup>レ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>乎<sup>ト</sup>問<sup>フ</sup>也<sup>ニ</sup>俗<sup>ノ</sup>談<sup>ノ</sup>



平結を正ん為也と 峯よ此たづと  
跋以てまづー今和作風の録譜及ウツアヒ附合  
俗信を正す加うるよ俗中の早俗形  
邪言を以て入るあり此正タビの字を胸よ  
何ふかたをうりまきり  
其くも露白き多形スナコ薄かり物也慈も  
蕉門乃魂跡ゆるるまのすくわん  
古池や種もよむ水の音

此吟有る自意乃頃の門人坊より依て  
そく先く正風の目を開くあり是は口中  
吾形乃珠者そ志く一也此珠を心珠  
自ミツ發句出ても蕉門の寂ナヒく樂い  
弟子是をよす計ニツの物く蕉風の舞  
切貫ツラスくらくら愛とーあり

○二系系りぬ種毒ク笑ん

曰蕉門を以て世々傳るものき先タビ云ハ







るき 蕙風 なつらるるき ね いたく 又蕙風

只直から 年一の 心定めを けり

月夜の古き 聖りも 雪あらし 頃の 只

かろ けり のま 時を <sup>ツキマ</sup> 費さ 一門 あり 是き

蕙門の 木偶人 <sup>モククワジン</sup> あり こそ 正風 あり けり

か 一 能 諧 きて けり 一 作 の 表 向 <sup>ヒ</sup> けり 諷 諫

談 笑 を 以 て す とも 云 けり 正 風 の 本 意 あり

諷 諫 の 句 子 談 笑 の 心 あり 母 談 笑 乃 句 子

紙 講 の ぬ け あり 八 有 厚 の 次

○ 古 池 の 句 子 冬 形 の 殊 あり とい へん

答 曰 此 句 物 心 蕙 門 乃 人 意 名 以 表 意 の 意

年 あり けり あり あり けり けり けり 是 亦 常 也

吟 あり けり 強 けり けり 少 あり けり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

けり けり 正 風 の 心 定 けり 今 乃 人 我 あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり



横階多ぶ——門人一論あり——此五文字  
山吹やと行ふ女何もと其好も忽々悟る  
古池や一服もとや是又其頃のみ分り哉  
六の白き岸の上より赤く考案とんたり  
吟じて空より白解をけぐれとて何れも  
無とも平老の柳の岸より生花を清と  
とんはる強く此白端を云く五文字山  
吹やとよと振るも坊よ上よりそのおれは衆

句にて形う吟也世に其の閑静を賞  
まねと一式を候式ハ寂只叶細と稱  
まねと形なあまは是ハ只音を笑の吟  
古池まわりの畦まの屋に怪をいひまとの  
形もあはに畦花ととまのも怪を思ふと  
何れも音の裡をいふのみと又同一無ハ  
音少くも字のみふしと音とらふ時ハ  
二義あり我等とれその音れ白と案ト



六桂飛の音淋——とちまへ——句弱體成  
 聞——古地よ水あはるまをて水の音と  
 子ま 禪機第一義 以乃く——六祖曹溪の  
 一なる如確と過去の音ハ過て未來の音を  
 不響 終り一聲と、聞——復うん音  
 響ハハ二義、音よりとを思ふの別  
 け飛の音との方如響を字ク、音よ飛の  
 珠あはる如く——此意味のるり響は一生の

句は魂タマからなる音あはる——然も他の句を  
 以ててけ魂を見得——はれハ今世に  
 芭蕉の句註して八百條章の内の中  
 八九十章を、緊出——句解をきりけ  
 書多見くはらに終りふの字のまといはる句  
 語の上下よのまを、遠を、幅、大切乃  
 事、まはるハ格物致知の類を、んも、知  
 とも先ハ象、象脚を、ん、人、し、



今世の論を平らぐ事、是も木偶人の如く、  
あやしく侍らん

○同日 綾足と云ふ人とは、  
その道を行くや、  
子、先よ、  
是より捷徑小等ん

名曰 綾足 蕉翁を和知混、  
識る、定る、具る、  
一、一、一

俗語を顧み、  
只、  
汗、  
我、  
き、  
事、  
一、  
と、



知れ少かる部をあげたるが爲に諸の如し  
 白も亦少かるに似るを蕉門の何れの名  
 つげたる。爲に侍の如き白も亦万葉傳の白も  
 あり能き入るべき。よもたりや種を流行せ  
 遊ひをホトトギス放りて片断の夏もよもたり  
 よもたりとていふに似て

○同日白屋坊とてそのがかりありて云々  
 子をツレ餓子ツレやめめは又怒らるるいふ

谷曰 白屋坊を予嘗實を一乗集あを  
 負尊蕉門と稱すと入試は是を予願の値  
 ありけ事一人よも告造らるるを恥と  
 然るにハこの條を予の友人と似る實の案  
 其角の編を予に以ておの躰わらさるも  
 麻島禪窟乃頌を以て芭蕉洞ツレ桃青  
 録不辨して記す其語震動空々久遠  
 實乃鼎を白を煉て龍の象を文字を治す云



かふ蕉翁の補巻の書を送りて見せしむる  
 蕉門の人よあはれ其意を承く味ハ翁の句魂  
 悉くしる又白尾坊曰翁貞享元禄と二人  
 の芭蕉何んやと云是ハ白尾坊翁の句を採る  
 ゆかり實と翁の一意なるを認め其句風  
 を意ふ翁世をきとて或七度瘧風り  
 人と号好も今初め早口校と云く其月の二り  
 尺と翁と意なり貞享以前貞享又元禄乃

頃と也句意をさかすはともあはれ遠かり  
 作くは新氏一代の説理結如く二人ハあらず  
 久しとも其間交う友人とのまじりて宗と  
 相おの翁の句と又たのさく白尾ハ只己の師を解  
 乃句風との胸うその氣地を味らるる語也

○

翁と意の意風はさるる乎ん  
 曰く旗中只あはれひきまもあ世よ年譜新巻の  
 記あはれもらうらうらふ大伴をさる



正保元年申

蕉翁生

伊賀上野  
藤堂家甲

寛文三年卯

翁七歳

浪人テ京  
出松尾氏

延寶二年 丑

翁三十歳

けり宗因風の能海や一説ハ泊船坐

宗房と云一由と坐し

又小村季吟の概茶の事本報と起

概青坊と云

内裡雛人形天皇の御宇と云

おとの白りりりと始るる

天和三年 亥

翁三十九歳

此以き深川に住居麻島に参拜の由也

古池や社殿のつひきわ

貞享元年 子

翁四十歳

寛文の一日 喜の日集出

那子今行 等

續のて わる 聖集のて



元禄二年 己 真州北国等行脚

おくの細道 巻 信義集

炭俵 深川集 二巻あり 集 出

元禄七年 戊 翁五十一歳

は年の十月は地の容會を駿馬や

ぬ鞠の趣きふ水ハ其酒より心を付を笑さん

者へうと元禄二年を家の末年を此、句風

強盛熱の付乃ぬ、少き程をくれさ、お會

あはれん力足らんハ又是をあまき情を吐き

そよふ、一さ頃の家の文も人なくを記す

あけさやま、一やらんれハかゝるを以て

成就とま定が、一強々年を以てし時を

一年、こゝ家の能く、よりるとま、あや

是、かき、非きん、新密とおま、まな

あ、は、年、お、五、十、一、程、あ、ら、う、と、ま、た、し、ん

と、ま、ら、り、唐、西、南、水、の、人、や、今、和、西、國、よ



杖をこびき 昔崎の 藤物と 唐土 船を 見ん  
あとして 伊賀を 斬りて 大坂より 舟を 疾く  
不立と 悉く 是事 未成就の 万が れハ 一休 儀  
續猿 筆等の 巻ハ 暫し 門人の 志に 任ず  
歸る 危の後 其人を 召て 又と 志を 傳ふ 時 阿ん  
じやと 思へ 至 然る 事 遠く 一て 枯尾 衣  
の一 齋に ありし 門人 共 團夜 の 歸り 後を  
みよ しく 歎か ぶの 好む 是れ 風を つて 云

今日の 錯乱 上 及ぶ 然らば 貞身 元 年乃  
頃を 翁 貞徳 の 伝を 雜土 此 在 風の一 門  
跡 起と ぬ也 を 深川 の 蒼々 古く 杉田 其 前  
嵐雪 輩一 有て 此 門の 美士 滿る 時 あり  
は 其 頃の 俳巻 真の 志を 一て 一れ 志 せん  
世も 多かる 終年 一の 此 志 守り 儀の だ とい  
と やり 此 道と せん 好む 多かる 志も 一れ 志 せん  
正しく 翁の 志と せん 志 守り 儀の だ とい







實の一粟 冬の日の 書は日 曠師

積之乃 ひとふ 十の債

如始より水と東花坊北門に其角の二を結を  
馬ゆつよ雲を——粟をけすを、續積業を  
如上式を又東花坊乃積 積業をさうふて  
代子深川集を以てまをわつてまの物好  
上儀を魚乃水も七部と定て半半可いし  
思ひ強て何を備へて只水のみをわつて  
し

積業の直上家の親約残をわつては

みま——粟を奇書なう人をしを伝達

か——を巻中よ氣凱高致乃吟おし

○ 中言のりも先同、粟凱を結とをうれ

其白を結をわ

答曰みま——粟ハ粟凱を結の伝達

然るもまを結るさんとわつてハ

系凱 我白人を知ラ 知を結まハ 子視 其角



高致

花より酒白

名馬

其亦 吾角詩高人 吟是より好と面吟乃歌  
僂 笑かたけり 似ちと 此より味ハハ 似て  
感嘆 といふ 是れ 是れ 抑々 形よめか  
これ 女くあり 只常の 暇イハレも 蕉翁の 業自と 似て  
其 法々 意味よ 馴れぬ

○ 向曰 倣意の事 良解 必 倣意 交々  
ら ぬ 近年 吾家 代類 論 著 種々

説 かなす 一 おもひ をも 回答 書 存 子 出

事 知 也 是 等 事 道 子 学 好 一 一 一

答 曰 是 様 々 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一

貞 徳 門 の 形 々 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一

は 何 々 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 書 録 懐 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

乃 志 々 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

蕉 風 無 形 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



季のち一定る人々を花の下をばはらむる家乃後

やも 隠すのぬむあふけくは依テ暮れも顔ち

案——へらま心頭う念より案——あ——

其頃のま事をし渡ハあつらふ出處事のほる

取し但し金——是貞事の燕屋やぞく

こは詮捨き云々お

子も等々を流るる流るる流るる

此立鳥のま文字に何れもどくまは

老心の子孫を遺愛するもれはしををい

せよは 越々云々

何のあはれも——は白ひ哉

まあまままの部まへまもまお月ひのま

候方の神候ま候まの吟や

這 出よからやの下乃 ひまの登

蟾と解も 春まのま 此句まお 五月のま

出羽の庭 念まの吟や







あつてや一或又一類の物を以てなす後一さ  
難の侍も他を以て証物の侍を名あや心止よ  
趣意を以て出まふと別ある押分るき  
拙<sup>キ</sup>やかた年き書<sup>フ</sup>ゆあや入る今  
音の論よきあまからト

○ 問曰 恙、心安、坐ゆまのいおれと今おれ候  
を以て一と會序を執キ文意を向ハ其  
式<sup>十六夕</sup>き勞<sup>十六夕</sup>事<sup>十六夕</sup>に<sup>十六夕</sup>一<sup>十六夕</sup>と<sup>十六夕</sup>を<sup>十六夕</sup>由<sup>十六夕</sup>に<sup>十六夕</sup>る<sup>十六夕</sup>も<sup>十六夕</sup>恙<sup>十六夕</sup>キ

初、道ありを

答曰 心を安しはるく是門の道ハ以て

早し一都<sup>テ</sup>文意を<sup>辨</sup>り<sup>テ</sup>序を<sup>改</sup>め<sup>テ</sup>傳

を<sup>と</sup>序<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>意<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>恙<sup>を</sup>連<sup>結</sup>乃

式<sup>を</sup>主<sup>と</sup>し<sup>て</sup>形<sup>を</sup>是<sup>に</sup>叶<sup>ふ</sup>ん<sup>事</sup>を<sup>み</sup>ぬ<sup>れ</sup>

恙<sup>ハ</sup>是<sup>門</sup>乃<sup>人</sup>の<sup>恥</sup>を<sup>く</sup>懼<sup>ふ</sup>を<sup>身</sup>一<sup>と</sup>

あ<sup>ら</sup>ば<sup>其</sup>序<sup>を</sup>以<sup>て</sup>踏<sup>ま</sup>ハ<sup>し</sup>る<sup>の</sup>宗<sup>通</sup>と<sup>疑</sup>問

恙<sup>を</sup>以<sup>て</sup>後<sup>事</sup>と<sup>尋</sup>ひ<sup>て</sup>句<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>問<sup>を</sup>



蕉門の恥と云に只心のひがみたる句を吐くは  
そのぐ損徳を云或ハ海車ウツのぶれを云  
句を弄して様子を汚し衆人の心をもねが  
か人ども序の巻を或ハ蕉門は其味  
と胸マ持しして或ハ諷諷フウフウ或ハ麻也マヤ或ハ情  
概カイあのを心ココロをうけしをんカに惟ただよるハ必カナラと云  
らん早理の句を吐く宗近乃式を云く  
人にも遠トホよまきく一是ふ一むの情あり

○ 同日或ハ人の疾小依りて經尺を汝ニに保ホらん  
あも恥ハらふ事コトなり

答曰 勿論の事や歌連歌の式を以てせば  
乃ソやましく調ふた事あり福と悔クハ階カり名録  
乃心を以てゆユ一ヒトつれハかきレ人の求モトり  
唐カラまカく一其書法を古人の書一コトを以て  
あハらガ一はハ一ヒトめノ一ヒトりハ一ヒトはハ一ヒトまバ  
書キわク勝カ水ノ墨ノ次キ多ク終リ強ク論トハハ次



老ゆ人あふむらふまきふに信字にん  
いふもゆるがは是を常用集に譲りて  
一巻の持を是とや

老古と純ニッ鷲鳴を此はるはあまうかく布  
信んふ水と舟法をたよ護ニッて論はめ

厚くはしる心少くして我儘

云ふも中一きり水鉅をあはざるものき

蕉門の形を察せしと思無邪の言

只ありすごとく成りて其の虚を妙にん

ふりて實よ於んしや道を学ふ者乃

常にやむい波を歌連歌乃次よ

主で心を向上の一語もあへしとら

伊ふがらん家よ予の愚なるがひあ察

今中歌連歌の形をい形よのこりい

な件にて心向上の一語もあふ徳行を

忘れはるるごと此一言のこは蕉門よ



遊ふ世に人も客人と湯に梓を  
朝陽錦子附く故園乃亦云  
三ふふふをのめらるる

贅言多謝

庚辰二癸巳中秋

加賀 杉菴麥水述

金城乃檀庵主 節、也

今もく名の津ふまへ 古きもの

道中事を採りて 正徳元

在池方おと 珠を投る 古の

いふく 遊るも 意匠 遊る







